



Title	地域社会からみた北大演習林I : 和歌山地方演習林の事例
Author(s)	門松, 昌彦; 神沼, 公三郎
Citation	北海道大学演習林試験年報, 16, 44-46
Issue Date	1998-09
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/73262">http://hdl.handle.net/2115/73262</a>
Type	bulletin (article)
File Information	1997_1B-6.pdf



[Instructions for use](#)

## I B - 6 地域社会からみた北大演習林 I. -和歌山地方演習林の事例-

演習林研究部 門 松 昌 彦  
北ステーション 神 沼 公三郎

### 1. アンケート調査の意義

地域住民が演習林の運営内容をどのように感じて、どのように評価しているのか、これは演習林の根本的な存在意義に関わる問題である。だがこの点を、日常の演習林運営のなかで体系的に把握するのは意外と難しい。比較的、簡単に地域住民の評価を集約するには、特定の機会を利用して、あるいはあえて機会を設けて、地域住民にアンケート調査を実施する方法が有効である。この方法によると、一度に多勢の地域住民の意向を集約できる利点がある。

### 2. 和歌山演習林におけるアンケート調査の内容

1996年は北大の開学120周年だったが、和歌山地方演習林でも独自の記念行事を開催しようと企画した。10月10日の祭日に地域住民を招待して演習林庁舎を案内するとともに、参集された地域住民にこのアンケート調査を実施した。当日、参集された地域住民は総勢114人、うち94人がアンケート調査に応じてくれた。回答率（回収率）は82%である。

114人全員を個別に確認したわけではないが、そのほとんどは和歌山地方演習林の所在する古座川町平井地区の住民であり、回答者94人についても同様である。ただ、数人は平井地区以外の住民が含まれていると思われるものの、その人たちも平井に隣接する地区の住民であり、和歌山地方演習林の地元の住民であるといつて差し支えない。なお、かりに114人全員が平井地区の住民であるとすると、平井地区の人口はおよそ190人なので、60%の住民が演習林の呼びかけに応じて行事に参加されたことになる。

アンケート調査の内容は、当日の行事に老人や子供たちも多勢、参加することを勘案して、記入式ながらもできるだけ回答しやすい簡単な質問にとどめた。質問は全部で7項目である。

1. 演習林（森）に行ったことがありますか？  
過去に 回、 最近行ったのは 年 月 ころ
2. 演習林（森）に行かれる主な目的とその理由はなんですか？
3. 演習林（森）に行かない理由があったらお書き下さい（1. でゼロ回の方）
4. 演習林（森）に自由に入れるとしたら、どのように利用したいですか？
5. 演習林はどんなことをしているところと思いますか？
6. あなたにとって、演習林はどんなところですか？
7. 演習林の森林の取り扱いについて何かご意見がありましたら、お書き下さい。

### 3. アンケート結果

以上のうち質問3、4への回答を除いて、アンケート結果を紹介しよう。まず回答者の性別年齢構成を示したのが図-1である。平井地区は典型的な山村集落であり、高齢化の進行が著しい。それを反映して、回答者の年齢構成は60歳代、70歳代、50歳代、40歳代の順になっている。しかも60歳代が飛び抜けて多い。ただし全回答者に関して女性が圧倒的に多く、男性が少ないのは、10月10日の祭日でありながらも地域における男性の職場（民間林業労働など）が通常の労働日だっ

たところが多く、そのため男性の行事参加者が少なかったことによる。

図-2は質問1に対する回答結果である。数回はこの場合、3回程度を意味している。無回答がやや目立つものの、多数回、10回程度、数回などが上位を占め、地域住民はそれなりに演習林の森林を訪れている。しかもその圧倒的多くは1993(平成5)年以降の入林である。

次に質問2に対する回答結果(図-3)であるが、どういう目的や理由で演習林の森林に入林したかという、見学が最も多く、ついで雇用、学校行事、親自然、仕事、山菜採取の順になっている。雇用は演習林の直営作業に雇用された林業労働、仕事は民間業者に雇用された林業労働・平井自治区の下水道ラインの維持管理作業・自分の養蜂作業などを演習林内で行うことである。これらの区分のうち見学、学校行事、親自然は同じ目的と考えてよい。あるいは山菜採取も同列に位置づけてよいかもしれない。そうすると、何らかの形で自然に親しむ目的の入林が63%にのぼる。だが一方で雇用、仕事が一定の割合に達しているのは、従来より林業労働が地域経済の重要な部分を占めている平井地区らしいところである。なお、この図-3以下の各図における回答の分類は、かなり多彩な回答内容を筆者らなりに単純化した結果を提示したものである。

以上の図-2、3は、和歌山地方演習林が最近、地域住民をしばしば演習林の森林に案内して、自然に親しんでもらったり、森林の持つ自然的意義を啓蒙、啓発している成果が一定程度、現れているものといえよう。

質問5、6、7に対しては回答者数が少なく残念であるが、回答者の立場に立って考えてみると、これらの質問にはかなり回答しにくいだらうと思われる。質問5に対する回答は図-4である。演習林の運営内容を森林管理と回答した人のほうが、森林に関する教育・研究と回答した人よりも多い。地域住民は、依然として演習林の林業労働の側面を強く受け取っている。

図-5は質問6に対する回答である。演習林の森林の自然的意義に注目した回答(休養の場・自然)と、その自然を社会教育などに有効に活用しつつある状況を積極的に評価する回答(社会教育・普及)は、似たような観点から演習林の存在意義を評価するものである。地域貢献はこの場合、地域住民の雇用を通じて演習林が地域経済に貢献している事実を評価しようとする回答である。そして、いわばこれらの諸点を総合した評価とでもいえようか、和歌山地方演習林が平井地区に所在することを誇りに思うと感じる趣旨の回答が提示されている。ただしこのような肯定的な評価ばかりではなく、演習林は「かたくるしい所」(65歳、女性)、「身近にあってもなかなか近づきたい所」(45歳、女性)という回答もあった。貴重な意見として肝に命じるべきであろう。

最後に質問7の演習林に対する意見になると、回答はわずか17人に限られた。その回答は数種類に分類できるが、主なものを紹介しておく、自然的意義とくに天然林については今後とも厳に保全すべきという趣旨の意見がいくつか示されていた。この意見と類似のものとして、これ以上、人工林を増加させないように、という意見も出されている。造成された人工林については十分な手入れを継続して、長伐期の立派な森林を育てるべしとする意見が述べられている。そして、北大演習林による森林管理の継続を要求する、意味深長な意見も提示されている。

#### 4 アンケート結果から得るもの

今回の回答者には男性が少なかったため、いままで演習林内で林業労働を行った経験のある人がそれほど多くは含まれていなかった。そのためであろうか、和歌山地方演習林におけるスギ、ヒノキ人工造林地の造成の歴史については、それほど高い評価が与えられず、むしろ紀伊半島の南部地域では非常に少なくなってしまう天然林の存在に注目し、その保全を求める意見が強かったのが印象的である。しかし回答者に男性が多く入ってくると、人工造林地の造成に自ら携わっ

た人も多くなり、いきおいアンケート結果の全体的ニュアンスはやや異なったものになるであろう。

それにしても、たとえ回答者に男性が少ないとはいえ、北大演習林の森林やその他の森林において展開された天然林の伐採とその跡地への人工造林及びその保育労働が、間違いなく戦後の生活の大きな部分を占めていた平井地区の住民が、和歌山地方演習林に残る天然林の意義をかくも高く評価しているのは、率直なところ意外であった。この要因としては、上に述べたような積極的な門戸開放策、地域住民に対する啓発行動のなかで、和歌山地方演習林が特に天然林の意義を訴えていることが挙げられるとともに、地域住民自身もその天然林の貴重さを十分に認識している事実を指摘できよう。ただし地域住民は、和歌山地方演習林が紀伊半島南部のスギ、ヒノキ人工林地帯において、技術面で指導的な立場をとっていけるよう、技術の更なる向上を要求しているのも事実である。

このような諸要求を総合した結果として、地域住民は、最近の和歌山地方演習林の運営内容、運営方向が実は大学演習林にふさわしいものであることを、冷静に見抜いているといわなければならない。

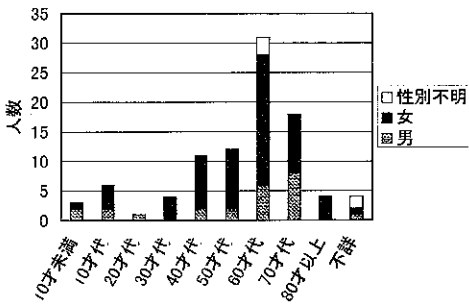


図-1 アンケート回収者の性別年齢構成

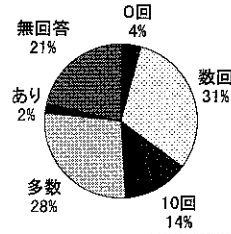


図-2 演習林の森林に入林した回数

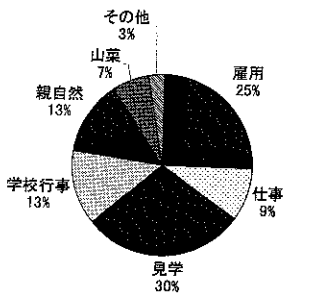


図-3 演習林の森林を訪れる目的 (複数回答)

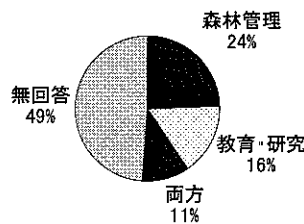


図-4 演習林は何をしているところ

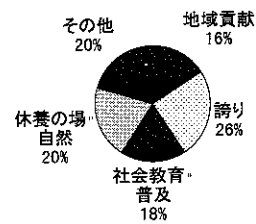


図-5 あなたにとっての演習林像 (複数回答)